

# 絵本・小学校低学年国語科教科書における分かち書きと文節表示

渡瀬 茂

姫路大学教育学部紀要

第11号

平成30年12月31日発行



# 絵本・小学校低学年国語科教科書における分かち書きと文節表示

渡瀬 茂

## 要旨

絵本や小学校低学年国語科教科書は、はじめて文字を学び始める時期の幼児児童に与える書物であるが、一文字分の空白で分かち書きされ、文章の表示は分節化されている。このような分節化はやがて行われなくなり、現代日本語の、漢字仮名混じり文で表記される通常の文章でそのようなことが行われないのはいうまでもない。本稿においては、このような分かち書きの表示が文字学習の初期になぜ行われるのかを考えた。このような表示がおおむね文節によって区切られていることに着目し、小学校学習指導要領やその解説では文節に触れられることがないにもかかわらず、じつは文字学習の初期において、文節による分節化が重要な役割を果たしていることを述べた。

キーワード……語、文節、分節化、文字、分かち書き

人間の言語は分節化を特徴とする。人間の言語は（アクセントを含んだ）音素を最小の単位として、その集積によって意節などの単位を形成し、さらにその集積によって語などの単位を形成し、その延長線上に文などのまとまりが形成される。逆に言えば、人間の言語は最小単位へと分節化していけるということである。言語によってそれぞれの単位は一律ではないにしても、この原則は当然ながら日本語にも当てはまる。そして重要なことは、言語の発話において最小単位からの集積の過程を通さなければならないし、逆に他者の発話を理解するためには分節化の過程を経ねばならないということである。音声言語の場合には音韻の単位の集積が意味的な単位となる。文字言語の場合には、ことに表意文字の場合にはいささか特殊な面が現れ、一つの文字が、古代漢語の漢字の場合のように、一つの語を表したり、現代日本語の漢字のように意味的な単位を表したりする。一方で、表意文字の場合には、その文字の集積が意味的な単位を表すことになる。

このうちの意味的な単位は、「単語」もしくは「語」とあると言いたいところである。英語やスウェーデン語のように孤立語化が進んでいる言語の場合には、おおよそこのように言えるのである。一方で屈折語の場合、たとえば古代ギリシア語やラテン語の場合には、名詞における性や格、動詞における時制や人称を一つの語に融合させながらも、一つの文字の集積が一つの単語に対応すると、おおむね言える。個々の文字と、意味的なまとまりとしての文の間にあって、重要な役割を果たすのは「単語」「語」であるということでは自明のことであると言えそうである。そして実際にも、学校文法において意味的な最小単位は「語」とあるとされている。しかし、文字学習の初期において、意味的な最小のまとまりは「語」とあると、果たして言うてよいのだろうか。このことについて、いささかの疑問がある。以下にこの疑問についての覚書を記したい。

## 小学校国語科学習指導要領の用語「語」と「文」

小学校の学習指導要領<sup>(注)</sup>およびその解説、ことに文字言語を学ぶ初期である一・二年度では「語」がどのように扱われているのかを見てみよう。（なお、括弧内の数字はページ数であり、「現」は現行の指導要領解説国語編、「新」は平成三三年度実施予定の新指導要領解説国語編を指す。また解説まで含めて「指導要領」と記す。）

まず、現行指導要領の「書くこと」に関してである。

各学年における「B書くこと」の指導事項

第1学年及び第2学年

記述に関する事項

ウ 語と語や文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと。（現

一八頁）

ウ 記述に関する指導事項

事柄の順序に沿いながら、文や文章の中で、語と語及び文と文との続き方を考えて記述することを示している。

前後の語句や文のつながりを大切に、一文の意味が明確になるように語と語との続き方を考えさせることを重視するとともに、離れたところにある語と語や文と文とのつながりについても考えさせるようにする。（現二六）

つぎに、新指導要領について引用しよう。

2 「思考力、判断力、表現力等」

B 書くこと

○ 考えの形成、記述

ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し

方を工夫すること。

事柄の順序に沿いながら、文や文章の中で、語と語及び文と文との続き方を考えて記述し、自分の考えを一層明確にしていこうことを示している。

語と語や文と文との続き方に注意するとは、前後の語句や文のつながりを大切にし、一文の意味が明確になるように語と語との続き方を考えるときともに、離れたところにある語と語や文と文とのつながりについても考えて記述することである。

内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫するとは、順序に沿って考えた構成を基に、内容が混在しないようにまとまりを明確にした記述の仕方を工夫することである。時間や事柄の順序を表す語を適切に用いたり、内容のまとまりが明確になっているかを確かめながら書いたりすることが重要になる。(新六五)

「読むこと」については以下のとおりである。現行の指導要領には、各学年における「C読むこと」の指導事項

第1学年及び第2学年

音読に関する指導事項

ア 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。(現二)

ア 音読に関する指導事項

音読には、自分が理解しているかどうかを確かめたり深めたりする働きと、他の児童が理解するのを助ける働きとがある。自分のために音読する場合は、文字を確かめ、内容が理解できるか、どのように感じるかなどを、自分の声を自分で聞きながら把握していく。他の人のために音読する場合は、音声化することによって、互いに理解し合っているかを確認し合うことになる。また、一人一人の理解や感想などを音読に反映させることもある。このような音読の基礎となるのが、「語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて」音読することである。明瞭な発音で文章を読むこと、ひとまとまりの語や文として読むこと、言葉の響きやリズムなどに注意して読むことなどが重要となる。(現二九)

とある。また朗読に関しては、新指導要領では以下のようである。

1 「知識及び技能」

(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項

ク 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。

語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読することを示している。

音読には、自分が理解しているかどうかを確かめる働きや自分が理解したことを表出する働きなどがある。このため、声に出して読むことは、響きやリズムを感じながら言葉のもつ意味を捉えることに役立つ。また、音読により自分が理解したことを表出することは、他の児童の理解を助けることにもつながる。

明瞭な発音で文章を読むこと、ひとまとまりの語や文として読むこと、言葉の響きやリズムなどに注意して読むことなどが重要となる。文字を確かめ、内容が理解できるか、ど

のように感じるかなどを、自分の声を自分で聞きながら把握していくことに重点を置くこととなる。(新四九)

さらに、文法的な事項では、現行の指導要領では、

各学年における言葉の特徴やきまりに関する事項

第1学年及び第2学年

言葉の働きや特徴に関する事項

(ウ) 言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。(現二五)

(ウ) は、語句に関する事項である。

言葉が小さな意味の単位である語句によって構成され、それらの語句が意味のまとまりによって語句の集合体(語彙) になっていることに気付くことを示している。

「意味による語句のまとまり」とは、ある語句を中心として、同義語や類義語、対義語など、その語句と様々な意味関係にある語句が集まって構成している集合体である。例えば、果物の名前を表す語句、気持ちを表す語句などは、相互に関係のある語句として一つのまとまりを構成している。

使用する語句の量や範囲を広げながら、語句相互の意味関係を理解するようにして、同義語、上位・下位語、同音異義語、多義語などの学習に発展させる指導が求められる。(現四五)

四五)

とある。

以上のように、書くことにおいて「語と語及び文と文との続き方を考えて記述すること」とあり、音読において「ひとまとまりの語や文として読むこと」とあるのを見ると、学習指導要領解説国語篇において、分節化の基準が「語」および「文」となっていることがわかる。語と語が結びつき、あるいは文と文とが結びついて文章を形づくることになる。そして文章を読むときにも「ひとまとまりの語」や「ひとまとまりの文」を単位として、メリハリをつけて読むことが重視されているということになる。しかし、とくに「ひとまとまりの語」というときに、その「ひとまとまりの語」というものがどのようなものであるのかはよくわからない。学習指導要領もその解説も、国語学的に正確に定義しようとしているわけではないから、このような曖昧な説明でやむをえないということになるのである。しかし、実際の小学校低学年の国語教科書の表記を見ると、文章を音読するときの最小単位がどのようなものであるかは、実は明快である。

小学校低学年国語教科書および絵本における文節表示

実際の教科書の例を引用してみよう。(注二) 東京書籍の小学校一年生の検定教科書のうちの下である。

二 のりもの のことを しらべよう よむ

◆ かいて あることを 正しく よむ。

どんな ふねが あるのでしょうか。

どんな ことを するのでしょうか。  
いろいろな ふね

(改頁)

いろいろな ふね

ふねには、いろいろな があります。

きやくせんは、たくさんの 人をはこぶ ための ふねです。

この ふねの 中には、きやくしつや しよくどうが あります。

人は、きやくしつで 休んだり、しよくどうで しよくじを したり します。

フエリーボートは、たくさんの 人と じどう車を いっしょに はこぶ ための ふねです。

この ふねの 中には、きやくしつや 車を とめておく ところが あります。  
人は、車を ふねに 入れてから、きやくしつで 休みます。

この場合は、文節の切れ目に一文字分の空白を挿入し、文節の切れ目を明確にしている一方、文節内の自立語と付属語の切れ目については明示されていない。また、絵本でも同様の現象は見られる。絵本の場合を引用しよう。岩崎書店刊の『うらしま』<sup>(注四)</sup>である。

むかし むかし あるところ いうらしまたろうという わかものが おとうさんと

おかあさんや いもうとと いっしょに すんでいました。

たろうは、まいあさ こぶねに のって うみへ さかなを とりに でかけます。

「きを つけるんだよ」

おとうさんと おかあさんが てを ふっています。

「おいちちゃん おみやげね」

いもうとは、かわいい こえで おねだです。

「いつてらっしゃい。わん わん」

しろも しつぽを ふって ついてきます。

「いつてきまあす」

たろうは、げんきな こえで いいました。

ゆうがたには、さかなを うった おかねで おいしいものや きれいな おにんぎょうを かって かえってくるのです。

この場合には、「あるところ」に「いうらしまたろうという」のように二つの文節をひとまとまりにしている箇所もあるが、「あるところ」は慣用的に一語として使われているともいえるし、「という」もその全体で接辞化しているとも言える。また、「ふっています」や「かえってくるのです」の「いる」「くる」は補助動詞として使われるものの、助動詞化した補助動詞を自立語と扱うか付属語と扱うかは議論の余地のあるところである。そしてこのような例外を除いて、おおむね文節ごとに、さきほどの教科書と同様に、文節の切れ目に空白を置いている。以上のように小学校低学年国語科の教科書においても、また絵本においても、その文章表記の最小単位として、文節が重要であったと言える。これらの表記において、とくに音読を通して国語の文節が

分節化の単位として重要であることを幼児児童に理解させ、あるいは体感させるようになっていく。

ただし、小学校二年生の教科書の途中で、このように文節の境目を視覚的に明示する表記法は行われなくなつてゆく。通常の国語の文章表記においては、文節の切れ目を視覚的に表示することは行われないが、そのような表記法に移行していくのである。もちろん、文節の切れ目を表示しないのだから、語の切れ目が表示されることもない。また絵本でも、やや年長者向けのものは文節の切れ目の明示は行われない。まず、絵本の例を示そう。あかね書房の『いなばのしろうさぎ』<sup>(注五)</sup>である。

あらくれもので聞こえた  
須佐之男の命の子孫にも

こよなく氣立てのよい神がいた。

大國主の命という。

命には、八十神とよばれる

兄弟たちがいたが

思いをよせる

因幡の国の八上姫を嫁にしようとする日、出雲の国をあとにした。

命は、兄弟たちの荷を

背負わされると

重い足どり

したがうのであつた。

つぎに小学校の教科書からの引用しよう。光村図書(注六)の小学校六年生の検定教科書である。

7 読む

伝統文化を楽しむ

昔の人のものの見方・感じ方や、現代でも親しまれている伝統文化について知ろう。狂言を楽しみ、音読しよう。

伝えられてきたもの

人々は、日本にまた文字がなかったころから、たくさんの話や歌を語りつぎ、歌いついできました。中国から漢字が伝わると、私たちの先祖は、それらの話や歌を、漢字を使って書き記すようになりました。そして、現存する日本最古の歌集「万葉集」<sup>(注七)</sup>が作られました。また「いなばのしろうさぎ」のような神話や、地方の伝承を記した書物も作られました。平安時代になると、平仮名や片仮名が生まれ、より多くの人が、文章を読んだり書いたりできるようになりました。貴族たちは、漢詩や漢文を楽しみ、短歌を作つて、手紙のようになり取りしました。……

とくに後者は、その文字表記のレベルとしては成人向けの文章と比しても遜色はない。初等教育の最終段階において、文字表記に関してはほぼ完成するのだと言える。もちろん漢字仮名



まじりの文章として、自立語のうちの名詞や動詞などが少なからず漢字で書かれ、その点では仮名と漢字の混在はある程度は文節や語を区切る役割を果たすとは言える。それでもこの文章にも「なかったところから」「歌いついできました」「記すようになりました」のような平仮名の連続がみられるから、文章のすべてが、文字種の違いによって分節化の示唆をされているとは言えない。

このことを国語を母語とする話者は普通のことと捉え、特段の不自由が国語話者を煩わせているということは見られない。これは国語の話者が、語や文節の区切りを明示しなくても、みずからその区切りを読み取り、文章を理解するのだということである。そしてそのような能力は、文字学習の初期の、文節の区切りを明示する表記から、漢字を学ぶことと並行しつつ、区切りを示さない表記へと移行し、本来的・伝統的に区切りを明示しない漢字仮名まじり文の表記に対応できるように成長してゆくのだということである。これはわが国語の伝統的な表記法に、国語話者が慣れ親しんでいく過程の初期の一段階であるということである。

翻つて、これを他の言語の文字表記と比較してみよう。まず、表意文字のみを使用する漢語を考えてみると、古代の漢語は漢字のひとつひとつが音韻のまとまりでもあり、意味のまとまりでもあったということでは、一文字が一語に対応していたのであり、文字の連続に対する切れ目の設定を考える必要はなかった。現代の漢語は複数の文字で表記する語が増加しているが、それでも文字と語との関係は古代漢語の性格を引き継いでいる。文字と語の音韻との関係についても、基本的に一対一の関係であり、明快であった。これは一つの漢字に複数の音読みおよび訓読みが対応しつる国語の場合とは異なっている。本来漢語のために発達した漢字を国語に持ち込んだことによる、他の文字体系に例を見ない文字と読みとの関係が国語の文字体系を特徴付けながら、それでも語もしくは文節ごとの分かち書きを行わなかった国語の文字表記は驚くべきものであるとも言える。ひらがなもカタカナも、いわば漢字の一変種であり、その結果として、表音文字でありながら、表意文字としての漢字の表記法を引きずっている。

では、表音文字の場合はどうなのだろうか。たとえばギリシア文字やローマ文字の場合、古代ギリシア語碑文や古代ラテン語碑文の初期には分かち書きが行われず、文字が区分なく羅列されていたようだが、後には分かち書きが行われるようになり、現代に至っている。ギリシア文字やローマ文字、あるいはキリル文字の場合はおおむね分かち書きの単位は単語であると見える。古代ギリシア語やラテン語のような高度な曲用を有する屈折語の場合も、ほとんど孤立語化している英語やスウェーデン語の場合も同様である。ロシア語の前置詞「B」や「C」は、発音は【v】、【s】であり、一語でありながら一音節をなす、後続する名詞などの語の第一音節と結合して一音節をなし、さらに後続する語の語頭音に影響を受けて【f】と無声音化したり、【z】と有声音化したりするが、それでも一語として扱われて分かち書きされる。

これに比べていわゆる膠着語の場合はどうであろうか。韓国(朝鮮)語の文字ハングルの分かち書きは単語ごとというのが原則ではあるようだが、名詞や動詞と接辞については一体として一続きにまとめられ、接辞と一体として表記される。北朝鮮ではハングル専用となり、韓国でもほぼ専用となっているので、分かち書きが原則となっているのは国語とは異なっている。

同じく膠着語に分類されるトルコ語はローマ文字で表記されるが、名詞の語幹と接辞は一体で記され、文法的にも一語と扱われるのは、日本での助詞と異なっているが、トルコ語の接辞は名詞の語幹の母音に影響を受け、母音調和の原則に従って実際の音が変化するのだから、日本語の名詞と助詞の関係よりも名詞語幹と接辞の関係ははるかに深いということが表記に反映されていると見える。いずれにしても、表音文字の表記で多くの場合に単語もしくは語幹に接辞を加えた文字列を単位とした分かち書きが行われると確認できるし、それは文字の表記の上で文法的な単位が明示されることにつながっているということである。そして文法的な単位が明示されることが、文章の読解のわかりやすさに直結しているからである。

さて、わが国語である。わが国語の表記は漢字仮名交じり文であり、表音文字と表意文字を混用する方法をとっている。歴史的に見れば、ひらがな書きの文章は漢字の混用は少なく、ひらがなが連綿体でひたすら続くような表記が行われ、分かち書きが行われてしかるべきかと思われるが、それでも分かち書きは行われなかった。一方、訓点付きの漢文から、カタカナを小字で書く宣命書きを経て、和漢混淆文を記す漢字カタカナまじり文へと発展し、これが現代の国語表記へとつながっている。漢字カタカナまじり文であるが、そこでは表意文字と表音文字との混用が文章の読解を助ける機能を果たしていた。戦前は仮名はカタカナから学び、(たとえば谷崎潤一郎の『鍵』や『瘋癲老人日記』)における男性老人の日記のように、漢字カタカナまじり文は生きていたが、現在では漢字ひらがな混じり文が圧倒的に主用となっている。

しかし、子どもたちが文字を習得するにあたって、この表音文字と表意文字を、ひらがな・カタカナと漢字を一気に学ぶことが不可能であることはいうまでもない。現代の国語教育においては、最初にひらがなを学ぶことが原則となっている。したがって、文字習得の最初期においては、ほとんど、あるいはすべての文字が表音文字であるという段階を経ることは避けられない。分かち書きはこの段階で文章を読みとるために求められている。のちには、表意文字である漢字を学び、漢字とひらがなが混ざられて表記されるようになると、表意文字と表音文字との組み合わせ自体から文法的な最小単位の読み取りが行えるようになるので、分かち書きをしない表記となっていく。カタカナもひらがなとは異なつた、重要な役割を果たし、語としての独立性を明示する。この方法では、最小単位の区切りが完全に明示されるわけではないが、日本語話者は文字が羅列されて分かち書きされない現代の表記法に対応できるように、訓練されているのである。

以上のように見てくると、絵本や小学校低学年教科書の表記の意義は、国語の文法的な分節化における単位としてなかに重要なものかを視覚的に明示していることと理解できる。最初に見たように、学習指導要領やその解説を読むと、国語の文法的な分節化の単位は語であるように理解できるが、そのじつ、文節が重要な役割を果たすことが、文字と文字のあいだの空白として示されているのである。

#### 絵本「は・を・へ」の意義

最後に、このような文節の重要性、そして自立語と付属語が結びつくことで文節が形成さ

れるという現象を、子どもたちに理解させようとする絵本の例を取り上げたい。「はじめてのこくこ」シリーズは小学校一年生を対象にしながら、「一年生が各教科にはじめてであつとき、生涯学習がスタートします」をモットーにし、助動詞など国語各分野について取り上げている、意欲的なシリーズであり、そのなかに『は・を・へ』と題された絵本がある。扱っているのはひらがなの「は」「を」「へ」であるが、この三つの文字が取り上げられる理由は説明するまでもない。現行の指導要領解説(四五頁)においても、「また、助動詞「は」「へ」及び「を」については、視写や聴写の指導などを繰り返すことによって、文の中で使えるようにすることが必要である。」と特筆されている。「は」「へ」は現代仮名遣いの原則としては音韻/ha/および/he/に対応する文字であるが、助動詞に限っては/wa/および/ya/が「は」「へ」によって表記される。また「を」は元来、音韻/wo/を表記する文字であった。ひらがなが成立した平安時代において、ワ行の/wa/、wi/、we/、wo/に対応する文字として「わ」「ゐ」「ゑ」「を」があった。このうちの/wa/は現在に至るまで音韻として残存しているので、現代仮名遣いのためにも「わ」は必要である。しかし、音韻/wi/、we/、wo/は紆余曲折のすえに、京都や大阪の方言でも、また共通語でも消えてしまっている。したがって「ゐ」「ゑ」「を」は現代仮名遣いでは使用が廃止されてしかるべきであったが、「を」だけは格助詞の/o/に用いるために残っている。しかし、この三つの文字は、現代仮名遣いにおいて、音韻との対応関係について例外であり、したがって幼児児童の文字習得にあたって誤りやすい。このことについては、この絵本の最初にも、主人公のけんたが黒板に書く場面に示されている。

こくこは、わたしはの べんきようでした。

けんたは、ようこと まえに でて、

せんせいの いう とおり かきました。

はくわ げんきです。

わたしわ 一ねんせいです。

(こくこの) かんたん。こくばんに かくのつて うれしいなあ。

つまり、けんたもようこも助詞の「は」を発音のとおり「わ」と書くところからはじまる。物語は当然、先生から誤りを指摘され、理解しにくい正書法のルールを理解してゆくという展開になる。「は」に続いて、「を」「へ」についても学んでいくことになる。

しかしこの絵本の特徴は、この三つのひらがなの文字の誤りやすい点を取り上げているだけでなく、この例外がなによって起こるのかを幼児児童に理解させようとしていることである。

「でも、『わたしは、げんきです。』と、いうように、

『わたし』と『げんきです』とを つなぐと、

わは、はなの。

こう すると でんしゃみたいに なるわ。」

せんせいは、でんしゃの えを はりました。

「みて ごらん 二つの しゃりようを、はが

つないで います。」

ここでは、幼児児童に文法的な事項を理解させようとしているのである。つまり、この絵本では自立語については車輪のついた機関車や列車で描かれているのに対して、「は」は車輪の欠けた四角い箱の連結器として描かれている。しかもこの絵本では、直接の説明の対象となっていない「ながれます」は語ではなく文節であるが、これも一つの車両として示している。すなわち、この絵本においても文節が文の分節化の基本的な単位であることが示されている。そしてこの絵本では、文節のさらなる分析として、自立語と付属語との連結であることを示し、この文法的な分析をふまえて、助動詞「は」「を」「へ」の正書法における例外的な扱いの所以を理解させようとしているのである。もちろん文法用語を用いるわけではないが、文法的な考え方の初期を教えるようとしていると評価できる。

小学校の国語教科書では文法に関する事項は取り上げられるものの、「主語」「述語」などの一部の用語を除き、文法用語は用いられない。文法を文法として、専門用語を学ぶのは中学校の口語文法からである。<sup>(注一〇)</sup> もちろん「文節」も「自立語」「付属語」も小学校では学ばない。しかし、正書法における「は」「を」「へ」の取り扱いを理解するには、文節とその構成要素たる自立語および付属語について、理解することが必要であることを、この絵本は示しているのである。

注

(一) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編 平成20年8月』(H二〇 東洋館出版社)、『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 国語編 平成29年7月』(H二〇 東洋館出版社)

(二) 小学校低学年国語教科書における文節ごとの分かち書きについては、府川源一郎『巻頭言』分かち書き(横浜国大国語教育研究二五 二〇〇六)に指摘がある。

(三) 『新編 あたらしいこくこ』二下(H二七 東京書籍)

(四) 『復刊・日本の名作絵本5 うらしま』(平岩弓枝文 新井勝利絵 一九六七刊 二〇〇二復刊 岩崎書店)

(五) 『日本の神話 第四巻 いなばのしろゝさぎ』(赤羽末吉絵 船崎克彦文 一九九五 あかね書房)

(六) 『国語 六 創造』(H二七 光村図書)

(七) たとえば『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著 二〇〇一三省堂)のうちの「ギリシア文字」「書体の変遷」に「この碑文上の文字は、一般に「記念碑体 (Monumental style) または「石文体 (Capitulary style)」と呼ばれ、平らな碑面にあらかじめ区画された横列に沿って鑿で刻まれるために、大きくても字面も斉一で、方形に近い均整のとれた字形を示している。のちのいわゆる「頭文字または頭字体 (Capital letter)」はこれを手本としたものである。この書体は、ギリシア語で στρογγύον「整列体」と呼ばれ、一つ一つの文字が独立にはば等間隔に並べられ、語の分かち書きや句読

点、また、アクセント記号なども一切見られず、その均整な字体と相まって簡素でしかも格調の高い美しさを生み出している」とある。なお、世界の文字については、同書のほか、世界の文字研究会編『世界の文字の図典 普及版』（二〇〇九 吉川弘文館）にも詳しい。

(八) 学校文法における文節は自立語だけ、あるいは自立語と付属語によって構成されているということになるが、これは学校文法による扱い方であって、学校文法にとらわれない、とくに西洋の文法学に影響を受けた日本語文法では、学校文法で一つの文節と扱うところを、一つの語と扱うものが見られる。たとえば小泉保の『現代日本語文典 21世紀の文法』（H二〇 太学書院）では動詞については、「書く」が非過去形、「書いた」が過去形、「書かない」が否定形、「書いて」が副詞形ということになる。

(九) 『はじめての こころ』⑥ は・を・へ（大越和孝・竹野栄作 大久保宏昭絵 一九九六 太平出版社）

(一〇) 中学校の文法教育における「文節」については、奥田俊博「国語教育における〈文節〉の指導について」（九州女子大学紀要 第四四巻二号 二〇〇八）に論じられている。

〔付記〕 本稿執筆の構想段階から実際の執筆にあたる間にあって、筆者の職務環境に激変があり、研究時間の確保に苦しみこととなった。本稿はその後半において、文からの分節化における品詞分解が国語の学習に果たす役割について、意味的な単位に関する分ち書きを行わない国語表記の特異性に着目しながら論じる予定であったが、その後半のすべてを割愛せざるをえなくなった。結果として構想の前半をかるうじて文字化することしかできず、発表に迷うところもあったが、備忘のためにあえて本誌に投稿し、後半は後日を期したい。

〔付記二〕 本誌創号の拙稿「中華周辺民族語の運命と歴史叙述」に重大な誤りがあるので、訂正します。一三七頁下段八行目の「北斉へと禪譲するところまでが記されている」を「北斉へと禪譲し、北周および北斉からさらに隋までが記されている」と訂正します。

(二〇一八・一一・九)